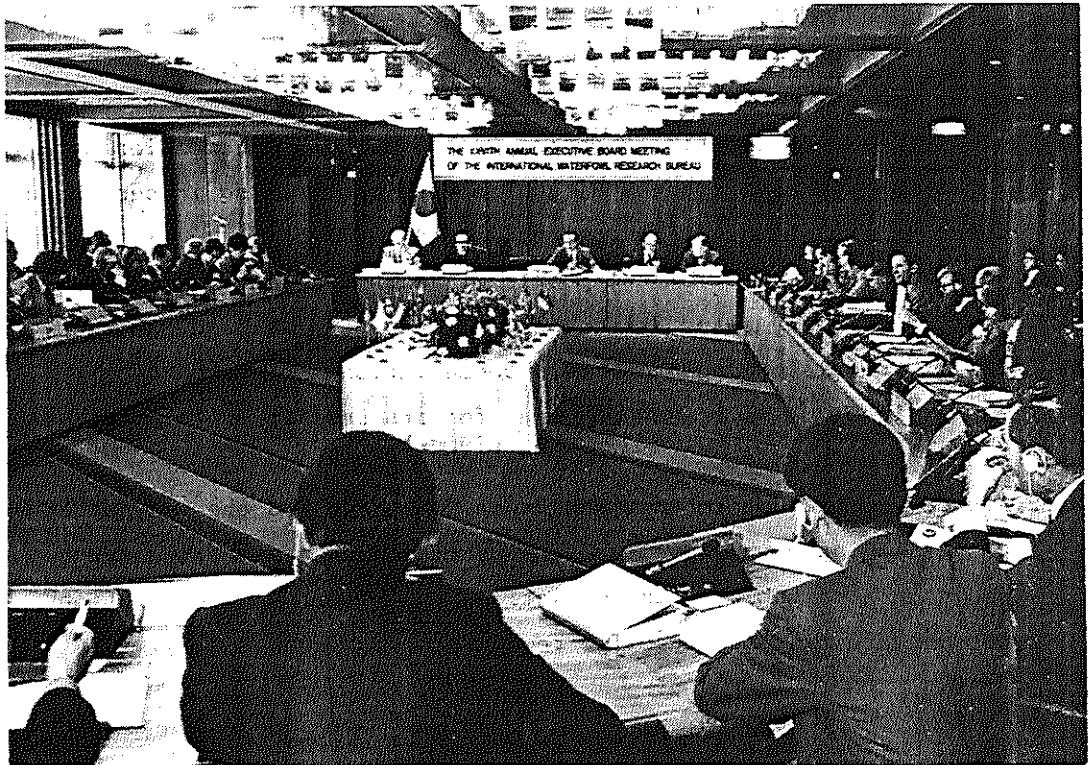


# IWRB第26回代表者会議 白鳥と鶴のシンポジウム

## の報告

松井 繁



私ども日本白鳥の会が発足時から提唱してきた IWRB の国際会議—第 26 回代表者会議、とハクチョウとツルのシンポジウム—が、本年の 2 月 18 日から 22 日まで札幌市の北方圏センターで開かれた。

18 日の開会式には常陸宮、同妃両殿下をお迎えし、IWRB のマシューズ会長、WFT のピーター・スコット会長、中国科学院動物研究所の鄭作新教授、韓国の元教授、国際自然保護連合 (IUCN) のアジア太平洋地区担当官のチュー博士など外国から 63 人、わが国から約 30 人が参加した。

ソ連からは 1 月中旬になって参加中止の連絡があり、残念であったが中国から上記の教授はじめ 4 名、韓国からは 11 名の参加があり、アジアでの IWRB の初めての代表者会議というにふさわしいものとなった。本会からは三上副会長以下十数名が参加し後述のようにシンポジウムで演題発表、討議などに活躍した。

会議の日程は、第 1、2 日は代表者会議、第 3 日は苫小牧のウトナイ湖へのオオハクチョウの標識作業の見学旅行、第 4 日と第 5 日の午前中は、ハクチョウとツルのシンポジウム、第 5 日の午後はアジアでの初めての会議ということから、それ

までの会議、シンポジウムの結果をふまえて、再び代表者会議を開き、決議、勧告をし、最後の2日は阿寒のタンチョウ、野付湾のオオハクチョウの視察旅行をして、一行が釧路から羽田へ立って行った。北海道の2月は吹雪が多く、もしスケジュールが狂って、この視察旅行が駄目だったら、或いは開会式とその前日に吹雪のため飛行機が欠航したらなどと随分心配をし、釧路空港で一行を見送るまで、心が休まらなかった。

### 専門家チームの報告から

代表者会議の報告には専門家チームの調査報告と各国代表の各国の現状報告があるが報告の中で興味深いものを報告する。専門家チームの報告は数年前から継続して調査していた、水鳥の鉛中毒についてのそれである。それはハンターの発射した霰弾が湖底や湿原にたまり、これを水鳥がえさと一緒に飲みこみ水鳥の体内に蓄積される。この汚染された水鳥を食べた人も鉛中毒になるわけであり、国によっては鉄製の弾に切り換えたり、鉛の上にプラスチックの被膜を施したりしている。

報告によると24ヶ国から鉛害が起きているとのことであり、IWRBとして鉛弾使用中止の勧告を出すことにした。

### 各国の代表の報告から

19日にアジア地域代表の報告が行われた。インド代表はアフリカ以外では生息が確認されなかったフラミンゴの一種の生息を報告し、中国代表は絶滅したと考えられていたオグロヅルを青海省で約70羽を確認したと報告した。韓国代表はこの数年、非武装地帯で1、2羽姿を現わしていたトキが、今年は0であると報告し、会場から失望のどよめきがあった。これに続いて国際ツル財団のアーチボルト博士は日・中・ソ・韓国が協力してコウノトリの計画繁殖を行うことを提案した。

### ツルのシンポジウム

中国代表の張作新博士は中国には約900羽のタンチョウが生息していることを発表し、インド代表はオグロヅルの初めての生態写真を発表した。

### ハクチョウシンポジウムから

換羽期に1万羽以上のコブハクチョウを捕獲して標識調査をしたデンマーク代表の報告、キャノネットですべて100から1,000羽単位のアメリカコハクチョウを捕獲して標識調査したアメリカのスレド教授の報告はいずれもこの方法が無害で学術的価値の高いことを強調していた。一度に数羽しか捕獲できない無双網を使用し、このプラスチックバンド標識法に反対する人も少ないわが国の現状とは全く対照的である。このシンポジウムで会員の服部氏が北海道におけるハクチョウの死因について、大森氏がわが国におけるハクチョウへの給餌の現状について、松井が北海道におけるハクチョウの渡りのルートについて報告し、中西・山内らが追加発言をした。

### IWRBとしての決議

最終日の22日の午後の会議でおおよそ次のような決議がされた。

1. 日本政府に対して、ラムサー条約の早期批准と、登録予定の釧路湿原の他に、鹿児島県出水の荒崎と、宮城県伊豆沼を登録するよう勧告する。
2. 日本はトキの増殖計画を速やかに実行し、中国・ソ連・韓国・北朝鮮と協力してトキの絶滅を阻止すべきである。
3. 日本の動物園において「つがい」でなく1羽づつ飼育されているコウノトリを一ヶ所に集めて繁殖させるべきである。
4. 第3世界の開発援助に当たっては、環境の保全に注意すべきである。
5. 鉛弾の追放・前述。

## アジア太平洋委員会の結成

会期中に参加していた国際自然保護連合のチューー博士が呼びかけ、アジア太平洋の自然を語る会が2月19日夜に開かれた。インド・中国・韓国・ニュージーランド・オーストラリア・日本の代表が集まった。この席で各国の交流の場を作ろう、という意見がでて、最終日の22日に再度協議して、IWRBのアジア太平洋委員会を結成することに決まった。事務局は日本に置くことになり、委員会運営の責任を課せられたがアジア太平洋の水鳥の保護を目的とする交流の場ができたのは今会議の大きな成果といえよう。

## エキスカーションから

2月20日のウトナイ湖へのエキスカーションではオオハクチョウのバンディングを見学。昼は苫小牧市長招待の昼食会に一同が参加する。2月23日、千歳空港から空路釧路着、一行はバスで釧路湿原を釧路博物館の橋本氏、北海道支部の林田会員の説明を受けながら視察し、昼は釧路市長主催の昼食会に一同が招待された。その後タンチョウの自然公園、タンチョウの里でタンチョウを観察して、阿寒公園に一泊、この夜は全員浴衣掛けで夕食。続いて二次会は一時過ぎまで行われた。

2月24日、早朝にバスで出発、阿寒国立公園の風景を楽しみ、尾岱沼に到着した。前日まで湾内は結氷しており、オオハクチョウは少なかったが、前夜の地震で氷が割れ、湾内があきオオハクチョウが1,600羽程度見られた。ここでもスレードン教授はハンディングを行った。別海町長主催の昼食会に一同が招待され、マッシューズ会長はオオハクチョウの越冬地としては当地はその羽数

が世界一と称賛された。昼食後バスを連ねて根釧原野を横ぎる。途中ユキホオジロの群れを観察して、最終目的地の釧路空港に到着し、空路羽田へ向かった。このエキスカーションには岩田・堀内・大森・阿部学・阿部敏夫・山内氏・松井が参加した



ウトナイ湖にて、望遠鏡をのぞこうとしているスレードン教授が、シンポジウム、代表者会議、続いてのエキスカーションと4日にわたる学人学者との交流はまことに有益なものであった。

## おわりに

日本白鳥の会が発会当初の目的の一つであるIWRBアジア太平洋会議を無事に終えたことを会員の皆さんに報告すると共に、ここに至るまで有形・無形の多大なる御支援を下さった皆さんに会議の実行委員の1人として心からお礼を申し上げます。

なおこの会議に参加の皆さんに、私が実行委員の1人として忙がしかったため、何もして差し上げることができなかったことを深くお詫びする次第である。

最後にアメリカのトランペッターズ協会 David K. Weaver とカナダのFischaw Wild ServiceのTames K. Kingの2氏がわが会に入会されたことを申しそえる。